

## Psychiatry and Clinical Neurosciences (PCN) の役割

| 加藤 忠史 Tadafumi Kato

PCN は、1933 年に『Folia Psychiatrica et Neurologica Japonica』として創刊され、1953 年に精神神経学会の機関誌となったが、1975～2008 年はフォリア刊行会から刊行され、1995 年に現在の誌名となった。刊行継続の困難に直面し、身売りを考えたこともあったが、出版社から呈示された買取価格をみて、諸先輩方がつくってきた価値の大きさを再認識した。同じ頃、学会でも英文誌刊行の動きがあり、両者が統合して、2008 年より再び本学会の機関誌となった。

筆者は、1990 年代末に編集委員会に参加し、2001 年から Associate Editor となった。当時は、著者と編集長のやりとりも日本語であった。2014 年に神庭重信先生と共に編集長となり、2022 年からは高橋英彦先生と 2 人で編集長を務めている。

PCN は、時代の変化に即応し、精神医学の進むべき道を指し示す論文を掲載している。先端技術を用いた精神疾患の病態解明、主体意識の観点からの自我障害の研究やひきこもりなどに関する新たな精神病理学、ニューロフィードバックなどの新規治療技術、治療ガイドラインの教育という社会実験、オンライン診療の臨床試験、脳病態を反映するバイオマーカー、精神医学における生成 AI の活用など、あらゆる新領域の研究をカバーしている。

葉の保険適用承認の根拠論文も少なくない。また、計算論的神経科学の精神医学における応用を論じた Friston, K 氏らによる論文、COVID-19 がわれわれの精神に与えた影響を神経哲学の観点から論じた Northoff, G 氏の論文など、本誌の総説論文は、世界の精神科医に新たな視点を提供し、インパクトを与えてきた。

COVID-19 パンデミック初期の 2020 年 2 月に、今後起こることを予測し論じた重村淳氏の論文は、各国の精神科医にパンデミックに伴う精神的課題に準備を促す役割を果

たした。企画したバーチャル特集号には 81 本の論文が掲載され、情報を即時に世界で共有し対応を促すプラットフォームとして機能した。

2016 年に、PCN を育てる PI ワーキンググループが発足し、本誌の質の向上をめざし、5 年以内にインパクトファクター (IF) 5 を目標として活動してきたところ、2021 年に目標を達成し、勢い余って、翌年には IF が 12 を超えてしまった。これは COVID-19 に伴う一時的な現象であり、次の IF が元に戻ってもどうか落胆しないでいただきたい。

本誌が何より重視しているのは科学的妥当性である。定期的に編集委員会で議論することで、一定の審査基準を適用する努力を続けると共に、1 本の論文で発表可能な内容を複数の論文に分割して発表する、いわゆるサラミ出版を含む不適切な行為に対しても、厳正に対処している。業績を増やすためだけの、論文のための論文ではなく、真に医学の進歩につながる研究を重視し、論文を掲載している。

査読後のリジェクトで著者の時間を無用に消費することのないよう、編集長が全論文を確認し、早期のディシジョンをめざしている。また、論文を読者に届けるため、SNS や日本語のニュースレターでも配信している。

機関誌であることから、学会のメンバーが中心となって編集委員会を構成しているが、アジア太平洋地域を中心とするエキスパートにも International Advisory Board を依頼している。

2022 年からより投稿しやすい姉妹紙として PCN Reports が創刊されたことに伴い、PCN は高いレベルの維持をめざすことが運命づけられた。

今後も、渾身の論文を PCN に投稿していただき、先人が築いた PCN という資産の価値をさらに高めることで、自身の論文の価値も高めるといふ、好循環を生み出していただければと思う。